

高崎市文化財調査報告書第340集

稻荷台北金尾遺跡2

病院建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014

高崎市教育委員会
技研コンサル株式会社

例 言

1. 本書は病院建設に伴う「稲荷台・北金尾遺跡」（市遺跡調査番号 611）の第2次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から報告書刊行に至るまでの一連の作業は、特別・特定医療法人群馬会の費用負担によって実施された。記して感謝の意を申し上げます。
3. 本調査および整理作業は高崎市教育委員会文化財保護課の指導のもと、技研コンサル株式会社が実施した。
4. 発掘調査および整理作業の体制は下記のとおりである。


遺跡所在地	群馬県高崎市稲荷台町字北金尾 1316 番
監理指導	山口一郎・田辺芳昭（高崎市教育委員会）
調査担当	中村岳彦（技研コンサル株式会社）
発掘調査期間	平成 26 年 10 月 2 日～10 月 17 日
整理作業期間	平成 26 年 10 月 18 日～12 月 25 日
調査面積	141.0 m ²
発掘調査参加者	遠藤好則 今野妙子 諏訪尤子 田部井美砂子 丸山文江 矢内朝夫
整理作業参加者	飯島冬子 杉田友香 高野フミ子 福島祿子

5. 本書の編集は中村が行い、執筆は I を山口が、他を中村が行った。
6. 発掘調査で出土した遺物および図面等の資料は、一括して高崎市教育委員会にて保管されている。
7. 発掘調査および報告書の作成にあたり下記の諸氏及び機関に有益な御指導、御協力を賜った。記して謝意を表します（敬称略）

鹿島建設株式会社

凡 例

1. 全体図および遺構平面図に示した方位は北に座標北を表し、座標については世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅱ系を使用している。本文および図中では下三桁を表記している。
2. 挿図に国土地理院発行 1/25,000「前橋」、高崎市発行 1/2,500 都市計画図を使用した。
3. 土層および遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）に拠る。
4. 掲載図面の縮尺は、全体図は 1/100、遺構図は 1/60 とし、図中にスケールを示した。
5. 遺物実測図及び拓影図の縮尺は土器は 1/4、石器は 1/1 を基本とし、図中にスケールを示した。
6. 本文および表中の計測値については [] は現存値を、() は復元値を表す。
7. 遺物写真実測図は 1/3 に近づけるように撮影を行い、それ以外のものについては右下に () で示した。
8. 遺物実測図、遺構図のトーン表現は以下のとおりである。

構築面（基本層序 V 層以下） 

9. 主な火山灰等の略称と年代は次のとおりである。

As-A（浅間 A 軽石：1783 年）、As-Kk（浅間柏川テフラ：1128 年）、As-B（浅間 B 軽石：1108 年）

As-C（浅間 C 軽石：4 世紀初頭）、Hr-FA（榛名二ツ岳浜川テフラ：6 世紀初頭）

Hr-FP（榛名二ツ岳伊香保テフラ：6 世紀中葉）

目 次

例言・凡例		(2) 土坑	9
I 調査に至る経緯	1	(3) 畠	9
II 調査の方法と経過	1	(4) ビット	9
III 道跡の立地と環境	3	(5) 低地部	16
1 地理的環境	3	(6) 窪地	16
2 歴史的環境	3	(7) 遺構外出土遺物	18
IV 基本順序	6		
V 検出された遺構と遺物	8	VI 発掘調査の成果と課題	19
1 調査概要	8	写真図版	
2 遺構・遺物	8	報告書抄録	
(1) 井戸	8		

挿図目次

第1図 調査区位置図	2	第7図 ビット(1)	10
第2図 周辺道跡面	5	第8図 ビット(2)	12
第3図 調査区全体図	7	第9図 As-B直下の低地部と1号骨出土状況	16
第4図 基本順序	7	第10図 窪地	17
第5図 井戸・土坑	8	第11図 出土遺物	18
第6図 畠	9		

表 目 次

第1表 周辺道跡一覧表	6	第2表 出土遺物一覧表	18
-------------	---	-------------	----

写真図版目次

PL.1 調査区全景(西から)		PL.3 調査区北部のビット群(東から)	
調査区全景(北東から)		調査区南東部のビット群(東から)	
		低地部と1号骨(北西から)	
		1号骨出土状況(北西から)	
		1号窪地完掘状況(北から)	
		2号窪地完掘状況(北から)	
		2号窪地古銭(11図2)出土状況(西から)	
		瓦屑中筑前藩高坪(11図3)出土状況(北西から)	
PL.2 基本順序A-A'(西から)		PL.4 下層トレンチ調査状況(西から)	
基本順序B-B'(西から)		表土除去作業風景(北東から)	
基本順序C-C'(北から)		発掘調査風景(南東から)	
1号井戸完掘状況(北から)		発掘調査風景(北西から)	
1号井戸遺物出土状況(北から)		出土遺物	
1号畠出土状況(北から)			
1号畠土層断面(北から)			

I 調査に至る経緯

平成 26 年 7 月 11 日付けで、特別特定医療法人群馬会より高崎市教育委員会（以下市教委）に群馬病院施設増設地の文化財保護法第 93 条の届出と試掘調査申込書が提出された。予定地の南側では、平成 21 年の病院改築時に伴う記録保存の発掘調査により、古代の集落跡や中世の館跡等が検出されており、当該地にも拡がりが見込まれることから、試掘調査により確認することとなった。

市教委は平成 26 年 8 月 5 日に工事予定地の試掘調査を実施し、部分的な復元はあるものの想定どおりに古代～中近世の遺構を確認した。

試掘結果を受けて、埋蔵文化財保護について事業者と協議を行ったが、建設予定の変更は不可能ということなので、文化財保護法第 93 条の規定による回答で、施設建設予定地の記録保存の発掘調査が必要であると指示を出した。

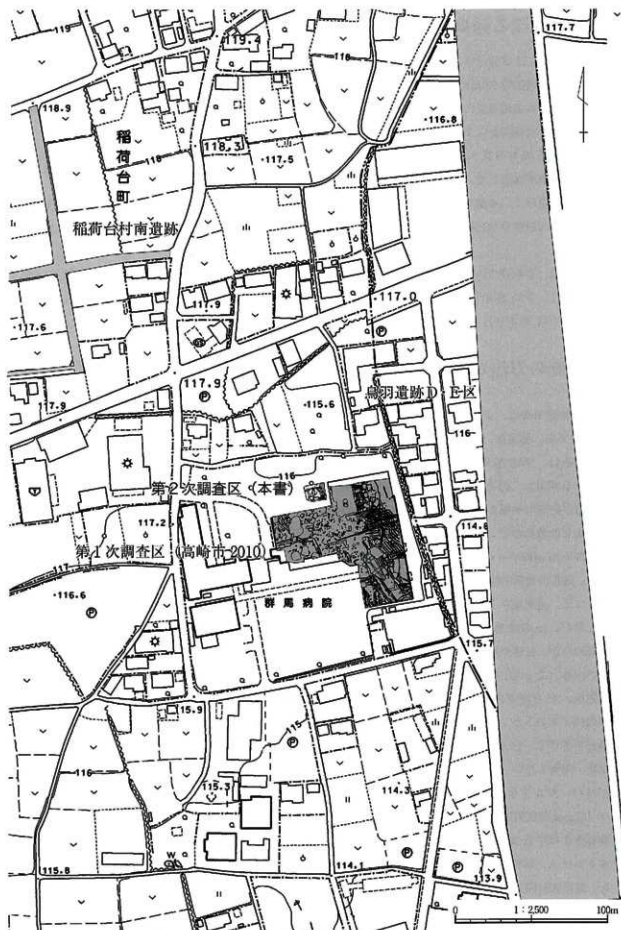
発掘調査は、市教委の作成する調査仕様書に基づく指導・監理の下、技研コンサル株式会社に委託して実施することとなり、平成 26 年 9 月 26 日付けで高崎市教育長・事業者・技研コンサルの三者協定を締結し、さらに協定に基づき平成 26 年 9 月 26 日付けで事業者と技研コンサルの二者で発掘調査委託契約が締結された。

II 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、試掘調査の結果に基づき、現状保存が不可能な病棟部分を対象に行った。調査面積は 141.0 m²である。座標は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅸ系を使用している。

発掘調査は、平成 26 年 10 月 2 日から開始し、初日は機材搬入や表土除去を行った。表土除去は 0.25 m²級バックホウを使用し、調査区の北東端部から南西端部へと順次展開した。表土除去はまず、As-B 混土層に相当する基本層序Ⅲ層の中層まで行き、これを 1 面目の確認面とした。表土除去と並行して遺構確認作業を進め、3 日には確認した数基のピット調査を行い、4 日に全景写真撮影と遺構測量を行い、1 面目の調査を終えた。7 日からは再び 0.25 m²級バックホウを使用して基本層序Ⅲ～Ⅳ層の除去を行い、これと並行して、2 面目の遺構確認作業と、調査区東部に堆積する As-B 一次堆積層の除去作業を進めた。8 日からは、確認した遺構の調査を開始。基本的には、遺構掘り下げ→セクション図化・写真→遺物出土状況図化・写真→発掘状況写真の手順で調査を行った。なお、As-B 純層の堆積範囲では、全面的に移植ゴテを用いて精査を行い、旧地表面に残る微細痕跡の検出に努めたが、足跡や耕作痕等は確認できなかった。9 日には遺構の調査を終え、10 日に全景写真撮影を行い、調査の主体となった 2 面目の終了確認が高崎市教育委員会により行われ、11 日には 2 面目の調査を終えた。終了確認後、As-B 直下の遺構面に相当する基本層序Ⅵ層以下における、遺構と遺物の有無を確認するために、調査区内に 4 本のトレンチを設定し、二次堆積のローム層に相当する X 層上面まで掘り下げた。16 日にはトレンチ調査を終了し、17 日に機材の搬出を行い、現地調査を終了した。測量は、電子平板を用いて平面図・断面図の測量・編集を行い、一部はオルソフォトによる写真測量を併用した。遺構写真の記録には、35mm 判モノクロ・リバーサルフィルム（CanonEOS55・EF28-105mm/PRESTO・ISO400/PROVIA・ISO400）とデジタルカメラ（CanonEOS50D・SIGMA DC18-200mm）を用いた。

整理作業は平成 26 年 10 月 18 日から開始した。出土遺物に関しては、洗浄、注記、接合・復元、実測・デジタルトレース、写真撮影を行った。遺物写真の記録にはデジタルカメラ（CanonEOS 5D / EF200mmL）を用いた。遺構図に関してはデジタルによる修正・編集作業を行い、報告書の編集に際しては DTP の手法を用いた。12 月 25 日に報告書を刊行し、全ての作業を終了した。



第1図 調査区位置図

Ⅲ 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

稲荷台北金尾遺跡は、高崎市稲荷台町字北金尾 1316 番に所在する。本市の中心街からは北へ約 7 km に位置するが、前橋市との市境付近であり、前橋市元総社町から続く市街地の西端にあたる。周辺には宅地や商業施設が林立し、本来の景観を望むことは難しくなりつつある。

本遺跡は、榛名山山麓の相馬ヶ原扇状地扇端部付近に立地し、前橋台地との移行地帯にあたる。榛名山は、那須火山帯の最南端を構成する第四期複合成層火山である。その東南麓に形成された相馬ヶ原扇状地は、榛名山を源流とする榛名白川と午王頭川によって形成された裾野扇状地で、約 14～17 万年前に生じた榛名山の火山活動や山体崩落によると考えられる相馬ヶ原扇状地地層から成る。その上部には浅間板状黄色軽石を挟んで、洪水堆積物である総社砂層が堆積する。この総社砂層は、縄文時代前期～後期にかけて堆積したものと考えられている。相馬ヶ原扇状地上には、この扇状地の伏流水を水源とする八幡川、牛池川、染谷川、天王川等の中小河川が北西から南東へ流下し、複雑な開析地形を形成しつつ井野川に合流する。本遺跡は、その染谷川中流域西岸の微高地上に立地し、西側には生産域となる後背低地が控える。

2 歴史的環境

縄文時代 本遺跡の周辺では、相馬ヶ原扇状地の形成と総社砂層の堆積が終了し安定化したと考えられる。縄文時代前期頃から遺跡が確認されている。前期の遺跡は少なく、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡 (121) で諸磯 c 式期の竈穴住居跡がわずかに確認されている程度である。中期には、相馬ヶ原扇状地を水源とする中小河川的作用により自然堤防が発達し、遺跡は増加に転じる。染谷川流域では上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡、元総社蒼海遺跡群 (46)、八幡川流域では北原遺跡 (119)、天王川流域では権現原遺跡 (97)、大八木箱田池遺跡 (100) などに集落跡が確認されているほか、本遺跡の 1 次調査でも中期の土器片が出土している。後期の明確な集落跡は確認されていないが、牛池川流域の西野分Ⅱ遺跡 (65)、染谷川流域の諏訪西遺跡 (126) などで遺物が出土している。晩期の遺跡も少ないが、烏羽遺跡 (122) などで遺構と遺物が確認されている。

弥生時代 前述した中小河川的作用により、本遺跡周辺には生産適地となる小谷地が形成され、遺跡も増加傾向にある。とはいえ前～中期の遺跡は少なく、染谷川流域の西三社免遺跡 (128) で前期末葉に属する遺物が、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡などで中期後半の集落跡が確認される程度である。後期になると遺跡は増加し、染谷川流域には日高遺跡 (110)、天王川流域には諸口遺跡 (99)、小八木志々貝戸遺跡 (131) など多くの集落跡が確認でき、正観寺遺跡群 (104) では、環濠集落や方形周溝墓も確認されている。また生産遺跡は、日高遺跡、中尾村前遺跡 (111)、菅谷石塚遺跡 (129) など多くの遺跡で A_s-C 軽石層の下層から水田跡が確認されている。

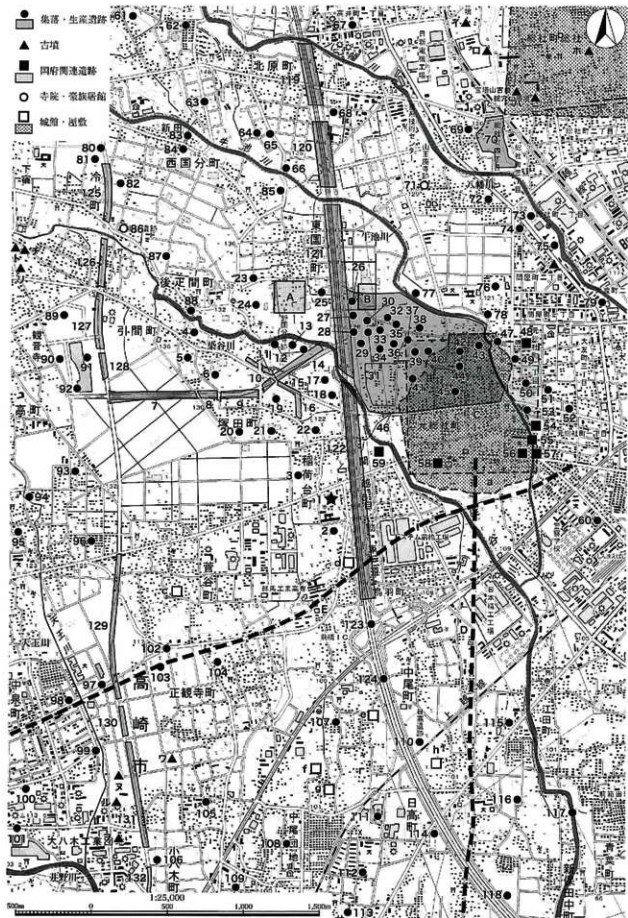
古墳時代 前期では、染谷川流域の上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡、西三社免遺跡、元総社西川遺跡 (13)、など、前代から続く遺跡が確認されている。しかしながら、周辺に該期の大型古墳は確認されておらず、より南方に所在する元島名将軍塚古墳を中心とした井野川中流域に、活発な集落展開が認められる。中期には西方の唐沢川流域に、豪族居館である三ツ寺Ⅰ遺跡や保渡田古墳群が営まれ、中心的な地域となる。その縁辺となる本遺跡周辺の染谷川流域では、前代からの展開に大きな変化はないが、烏羽遺跡、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡、冷水村東遺跡 (125) などで集約的に集落が確認され、北谷遺跡 (86) では豪族居館が確認されている。また、生産遺跡は日高遺跡、中尾村前遺跡などで Hr-FA の下層から、日高遺跡で Hr-FP の下層から水田跡が確認されている。遺跡周辺は、6 世紀に生じた榛名山の噴火によって、広く Hr-FA、Hr-FP を起因とする土石流や洪水に見舞われたが、該期の遺跡は多く確認されており、烏羽遺跡、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡、棟高遺跡群 (91) など各所に集落跡が確認できる。5 世紀末葉から 7 世紀末葉に形成された総社古

墳群は、遠見山古墳(ホ)、王山古墳、総社二子山古墳(イ)、愛宕山古墳(ロ)、宝塔山古墳(ハ)、蛇穴山古墳(ニ)と続く。中でも、宝塔山古墳や蛇穴山古墳の墳丘規模や家型石棺、截石切組積石室の加工技術は該期において突出しており、上毛野氏との関連も指摘されている。その石材加工技術は、7世紀後半創建と考えられる山王庵寺(71)の石造物に共通性が認められ、これらの遺跡を中心とした八幡川、牛池川、染谷川中流域の一角は、7世紀における上毛野の中心地域であったと考えられる。

奈良・平安時代 本遺跡は該期において国府推定域の南西周辺部に位置し、1次調査では集落跡が確認されている。北約1.3kmには上野国分僧寺(A)と上野国分尼寺(B)が所在する。上野国分僧寺は『続日本紀』によれば、8世紀中葉頃には主要な堂宇が整備されていたことが知られる。昭和40年代から断続的に続く確認調査で、主要伽藍の配置や変遷が推定されているが、平成26年の調査では金堂基壇が確認され、その配置に再検討が加えられつつある。僧寺と尼寺の間に位置する上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡では、堅穴住居跡や掘立柱建物跡からなる大規模な集落跡が確認され、宝相華文飾金具、円面硯、石製腰帯具、白磁碗などが出土している。国府推定域では多くの調査例がある。代表的な事例としては、国司館の存在に関わる「大館」墨書土器が出土した元総社蒼海遺跡群26、付属官衙の可能性も考えられる大規模な掘立柱建物跡や「曹司」墨書土器、畿内産陶文坏が出土した元総社蒼海遺跡群7・35、元総社小学校校庭遺跡(56)、官営工房と考えられる専用鍛冶工房群が確認された鳥羽遺跡I区、国府に関連すると考えられる大溝が確認された元総社蒼海遺跡群3・7・9・10・14・19・36・58、関泉橋遺跡(48)、元総社明神遺跡(54)、寺田遺跡(57)、国府城南南線における鞍川祭祀を彷彿とさせる人形などの木製祭祀具が出土した元総社明神遺跡、寺田遺跡、国府城南西に安置された社の可能性もある神社遺構が確認された鳥羽遺跡II区などが挙げられ、これら遺跡の一角からは青磁・白磁・緑釉陶器・灰釉陶器・陶硯・銅塊・腰帯具などが他地域よりも多く出土している。また、平成23年からは国府域の確認調査が実施されつつある。国分僧寺と本遺跡の間にあたる国府推定域の西方周辺部は、地形的な要因もあつてか遺跡が多く、微高地には密度の高い集落跡で埋め尽くされており、棟高丈久保遺跡や引間六石遺跡(8)では腰帯具が、塚田中原遺跡(10)では奈良三彩・緑釉陶器・鉄製権が、元総社西川・塚田中原遺跡(14)では緑釉陶器・陶硯・皇朝十二銭「長年大宝」が出土している。一方、国府推定域を離れて南方・西方に目を向けると、南方約600mには、9世紀後半以降に整備されたといわれる東山道駅路「国府ルート」の路線が国府推定域から西へ延びており、鳥羽遺跡、正観寺遺跡群O区(103)、菅谷石塚遺跡などで関連する道路状況が確認されている。その南方には、正観寺遺跡群、中尾遺跡(123)などで大規模な集落跡が確認されており、正観寺遺跡群では白銅製の八稜鏡や腰帯具が出土している。また小八木志々貝戸遺跡では8世紀中葉の溝で画された掘立柱建物跡群や井戸が確認され、富家層の居宅である可能性が指摘されている。生産遺跡は、日高遺跡、井野矢ノ上遺跡(112)、正観寺遺跡群、菅谷石塚遺跡などでAsB軽石層の下層から条里型水田が確認されている。

中世 天慶2年(939年)に上野国府は平等門によって占拠され、治承4年(1180年)には源平の争亂のさなか、足利俊綱によって周辺地域が焼き討ちに遭う。国府の統治機能は次第に変容・形骸化してゆくが、地政的には依然重要な位置にあった。鎌倉時代に属する遺跡はほとんど確認されていないが、室町時代になると、上野国守護の上杉氏から上野国守護代に任命された長尾氏によって永享元年(1429年)に蒼海城(a)が築かれる。蒼海城は県内でも最古級の城郭に位置付けられており、その縄張りには国府推定域に重複し、元総社蒼海遺跡群で関連する堀跡や青白磁梅瓶などが出土している。また、周辺には周囲に堀を巡らせた該期の屋敷や集落も多く確認されている。本遺跡東側に隣接する鳥羽遺跡E区では、14世紀末～15世紀中葉に築かれたと考えられる館跡が確認され、本遺跡の南に推定されている金尾城(d)との関連が指摘されている。また、菅谷城跡(c)や中尾城跡(e)も同様の遺跡と考えられている。

近世以降 天正年間以降、蒼海城には諏訪・秋元氏が入府するが、慶長6年(1601年)には秋元氏が総社城(b)に移り、蒼海城は廃城となる。本遺跡周辺は、江戸時代には高崎藩に属した。その後、明治4年(1871年)に



第2図 周辺遺跡図

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名		
1	福岡台北東海環道跡(本線)	24	引間石倉遺跡	47	元徳社稲島神社遺跡	70	大塚遺跡群	93	稲高村北遺跡	116	新保田中・馬折遺跡	へ	福岡山内墳
2	福岡台東東海環道跡	25	上野原分二寺中岡地蔵堂跡	48	辰島神社遺跡	71	山王塚寺	94	稲高八幡宮遺跡	117	新保田中遺跡	ト	植北東海環道北号古墳
3	福岡台村東海環道跡	26	元徳社小見Ⅱ遺跡	49	辰島神社遺跡	72	昌法寺聖徳遺跡・Ⅱ遺跡	95	三ツ寺南宮遺跡	118	北沢遺跡	ナ	植北東海環道e号古墳
4	引間北見Ⅱ遺跡	27	元徳社小見Ⅲ遺跡	50	辰島遺跡・Ⅱ遺跡	73	稲井城ノ本遺跡	96	植北字東元二部遺跡	119	北沢遺跡	リ	北沢原古墳
5	引間三社免遺跡	28	元徳社小見Ⅳ遺跡	51	辰島Ⅱ遺跡	74	辰島遺跡Ⅲ遺跡	97	新保原遺跡	120	回分原遺跡	ネ	オウカ山古墳
6	引間松原・福岡地蔵堂跡	29	元徳社小見Ⅴ遺跡	52	藤洲遺跡	75	稲倉塚東遺跡	98	稲高門Ⅴ遺跡	121	上野原分寺・尾号中岡地蔵堂跡	ロ	三平山古墳
7	稲高久保遺跡	30	元徳社小見Ⅵ遺跡	53	大穴取Ⅱ・Ⅲ遺跡	76	元徳社稲高塚大迫塚遺跡	99	井口遺跡	122	島津遺跡	ウ	トミカ古墳
8	引間六石遺跡	31	元徳社小見Ⅶ遺跡	54	元徳社明神遺跡	77	元徳社北川遺跡	100	大八木御前遺跡	123	中尾遺跡	フ	福岡塚古墳
9	引間松原遺跡	32	元徳社小見Ⅷ遺跡	55	元徳社寺平遺跡Ⅰ～Ⅲ	78	辰島寺稲高塚大迫塚遺跡	101	西宮遺跡	124	秋良遺跡		
10	福岡中塚遺跡	33	元徳社小見Ⅸ遺跡	56	元徳社小学校伏魔遺跡	79	大池遺跡群	102	曾谷遺跡	125	冷水村東遺跡	A	上野四分寺寺
11	引間松原遺跡Ⅱ	34	元徳社寺平Ⅱ遺跡	57	寺田遺跡	80	西宮分館田遺跡	103	志願寺遺跡群(Ⅰ区)	126	深溝遺跡	B	上野四分寺寺
12	上野四分寺寺遺跡	35	元徳社小見Ⅹ遺跡	58	天神遺跡・Ⅱ遺跡	81	冷水寺平遺跡	104	三環寺遺跡Ⅰ～Ⅳ	127	小池遺跡	C	上野四分寺寺
13	元徳社西相遺跡	36	元徳社小見Ⅺ遺跡	59	養熟遺跡・Ⅱ遺跡	82	冷水村Ⅲ東遺跡	105	小八木宅山遺跡	128	西三社免遺跡	D	上野四分寺南宮遺(白高遺)
14	元徳社西相・福岡中塚遺跡	37	元徳社小見Ⅻ遺跡	60	元徳社稲高遺跡	83	西宮分Ⅱ遺跡	106	小八木遺跡	129	菅野石塚遺跡	E	粟山古墳(新井ルート)
15	福岡中塚遺跡Ⅱ	38	元徳社小見Ⅼ遺跡	61	養熟遺跡	84	西宮分Ⅲ六割遺跡	107	中尾所之免遺跡	130	新宮寺遺跡		
16	福岡村東遺跡	39	元徳社小見Ⅽ遺跡	62	鏡野谷遺跡	85	西宮分南御前遺跡	108	新野宮遺跡	131	小八木志々貝戸遺跡	イ	養南遺跡
17	福岡中塚遺跡	40	元徳社小見Ⅾ遺跡	63	西宮分向原遺跡	86	北谷遺跡	109	小八木貝戸遺跡	132	小八木井原遺跡	ロ	松林城跡
18	福岡村東遺跡	41	寺谷遺跡	64	北塚下原遺跡	87	引間西出雲遺跡	110	日原遺跡			シ	曾谷城跡
19	福岡村東遺跡	42	西田川遺跡	65	西宮分Ⅳ遺跡	88	辰島神社遺跡	111	中尾村遺跡	イ	花井二子内墳	ク	倉崎城跡
20	福岡村東遺跡	43	辰島神社長明寺Ⅱ遺跡	66	西宮分Ⅴ遺跡	89	稲高塚南宮Ⅱ遺跡	112	養野久ノ上遺跡	ロ	愛宕山古墳	ク	中尾城跡
21	福岡村東遺跡	44	元徳社宅遺跡	67	井木遺跡	90	稲高江ノ内Ⅱ遺跡	113	井野原遺跡	ハ	北塚山内墳	ク	小八木新井原古墳
22	福岡村東遺跡・福岡村東遺跡	45	元徳社小見ⅰ遺跡	68	北塚一町東遺跡	91	稲高塚跡	114	上日高山貝戸遺跡	ニ	植六山古墳	ク	黒崎城跡
23	引間西出雲Ⅱ遺跡	46	元徳社西海遺跡群	69	村東遺跡	92	稲高江ノ内Ⅲ遺跡	115	新宮遺跡	ホ	浅見山古墳	ハ	上日高山古墳(田村原遺跡)

高崎県、同6年に熊谷県となり、明治9年(1876年)には群馬県となった。太平洋戦争中の昭和18年(1943年)には、本遺跡の北西約800mに陸軍前橋飛行場が建設され、関連する遺構は標高辻久保遺跡で確認されている。

IV 基本層序

基本層序は、調査区東壁の北端部・中央部・南端部の3地点で観察した(第4図)。Ⅲ層はいわゆるAs-B混土層で、1次調査のⅡ層に相当すると考えられる。この土層は、本遺跡周辺の低地部において広域的に分布しており、今回の調査では、この層の中位を中世以降の遺構確認面と判断した。Ⅳ～Ⅶ層の堆積は、わずかな調査範囲であるにもかかわらず、地点により変動的な様相を示す。Ⅳ層は基本層序B-B'で部分的に確認した褐色土火山灰の薄層で、層序からはAs-Kkの可能性がある。Ⅴ層はAs-Bの一次堆積層。調査区東端の低地部に堆積し、2～3のフォール・ユニットが観察できた。1次調査のⅢ層に相当する。古代の遺構確認面は、Ⅲ・Ⅴ層を鍵層に、その直下にあたるⅦ・Ⅷ層の上面と判断した。Ⅵ層の上端はAs-B降下時の旧地表面にあたり、平安時代の遺構構築面である。1次調査のⅣ層に相当する。1次調査では、調査区東半部において該期の遺構群が確認されているが、今回の調査では、該期の遺構はほとんど確認できなかった。Ⅷ層はHr-FAを多く含む。調査区南端部で部分的に確認した。なお、1次調査では、調査区北東部においてHr-FA層の純層が確認されている。Ⅷ層はAs-Cを多く含む黒色土で、いわゆる「C黒」である。調査区南端部で部分的に確認した。1次調査のⅥ層に相当する。Ⅸ層は、わずかながら縄文時代の遺物を包含する。Ⅹ層は水性ロームの二次堆積層。Ⅺ層は、しまりの非常に強い灰黄褐色砂質土で総社砂層と考えられる。

V 検出された遺構と遺物

1 調査概要

今回の調査区は、1次調査区の北側隣接地点にあたる。調査にあたっては、As-B 混土層に相当する基本層序Ⅲ層中位を第1面の遺構確認面としたが、1号土坑とP 1～14の各ピットが確認できたのみであった。また、As-B 純層の下層にあたる基本層序Ⅵ・Ⅶ層を第2面の遺構確認面としたが、確認した遺構の大半はAs・B混土を覆土としており、本来は第1面に属する遺構であった。そのため、第3図の調査区全体図においては、第2面における各遺構の状態を図示した。

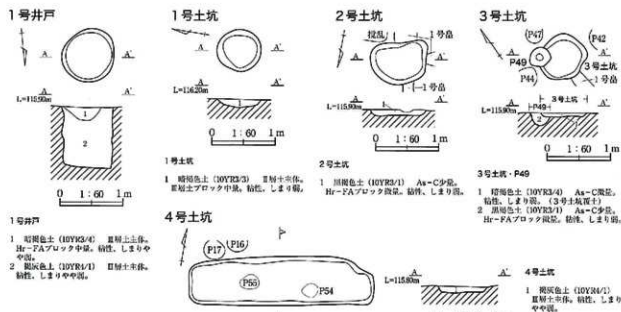
遺構の密度は各面とも希薄で、古墳～奈良・平安時代の畷1箇所、土坑2基、ピット9基、窪地1箇所、中世以降の井戸1基、土坑2基、ピット46基、窪地2箇所を調査した。遺物は、井戸から常滑焼や須恵器、土坑から天目茶碗や土師器・須恵器、窪地から古銭、遺構外から丸瓦、土師器、須恵器、縄文土器等が出土したが、いずれも細片であり、遺構密度に比例して出土遺物の量も少なく、遺物収納箱1箱にも満たない程度である。

2 遺構・遺物

(1) 井戸

1号井戸 (第5図、第2表、PL. 2・4)

位置 調査区東部 (X = 42.730, Y = - 72.510)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。形状 平面形は円形、断面形は円筒状を呈する。規模 東西0.83 m × 南北0.84 m、深さ0.97 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。底面 基本層序Ⅺ層に達し、底面は平坦。残存する深度は浅いが、湧水層までは達しており、調査中も滲む程度の湧水が確認できた。出土遺物 第11図1は常滑焼甕の口縁部片で、覆土最下層から出土した。断面「N字状」の口縁形態を示し、中世知多露編年6 a型式に相当するものと考えられる。他に、同一層位から須恵器甕の胴部片が出土し、上～中層からも常滑焼甕の胴部片や須恵器坏片が出土したが、いずれも細片であり図示には至らなかった。時期 覆土の様相や覆土最下層出土の第11図1から、13世紀以降と考える。



第5図 井戸・土坑

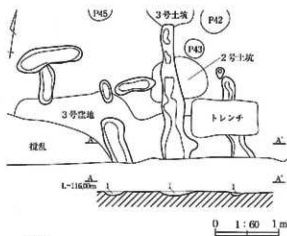
(2) 土坑

1号土坑 (第5図) 位置 調査区中央部 (X = 42.730, Y = - 72.510)。第1面で確認した。形状 平面形は円形、断面形は弧状を呈する。規模 東西0.67 m × 南北0.68 m、深さ0.13 mを測る。覆土 基本層序Ⅱ層土を主体とする。出土遺物 覆土中から土師器甕の胴部が1片出土したが、細片であり図示には至らなかった。時期 堆積状況から近世以降と考える。

2号土坑 (第5図) 位置 調査区南東端部 (X = 42.725, Y = - 72.505)。第2面で確認した。主軸方位 E - 13° - N。形状 平面形は不整形円形、断面形は箱状を呈する。規模 長軸0.97 m × 短軸0.67 m、深さ0.09 mを測る。覆土 Hr-FA、As-Cを含む。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代と考える。

3号土坑 (第5図) 位置 調査区南東端部 (X = 42.725, Y = - 72.505)。第2面で確認した。重複 P 49と重複し、本跡の方が新しい。形状 平面形は不整形円形、断面形は箱状を呈する。規模 東西0.75 m × 南北0.68 m、深さ0.07 mを測る。覆土 As-Cを含む。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代と考える。

4号土坑 (第5図) 位置 調査区北東部 (X = 42.730, Y = - 72.510)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。重複 P 54・55と重複するが、覆土の土質は同質であり、同時期だろう。主軸方位 W - 9° - N。形状 平面形は長方形、断面形は箱状を呈する。規模 長軸2.87 m × 短軸0.78 m、深さ0.11 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 覆土中から天目茶碗の口縁部1片、土師器甕の胴部1片、須恵器甕の胴部1片が出土したが、いずれも細片であり図示には至らなかった。時期 堆積状況から中世以降と考える。



1号儀

I 埴輪粘土 [1093・3] Hr-FAブロック多量、粘付、Lミナリ。

第6図 土

(3) 竈

1号竈 (第6図、PL. 2) 位置 調査区南東端部 (X = 42.725, Y = - 72.505)。第2面で確認した。重複 2・3号土坑、3号窪地と重複し、本跡が最も新しい。

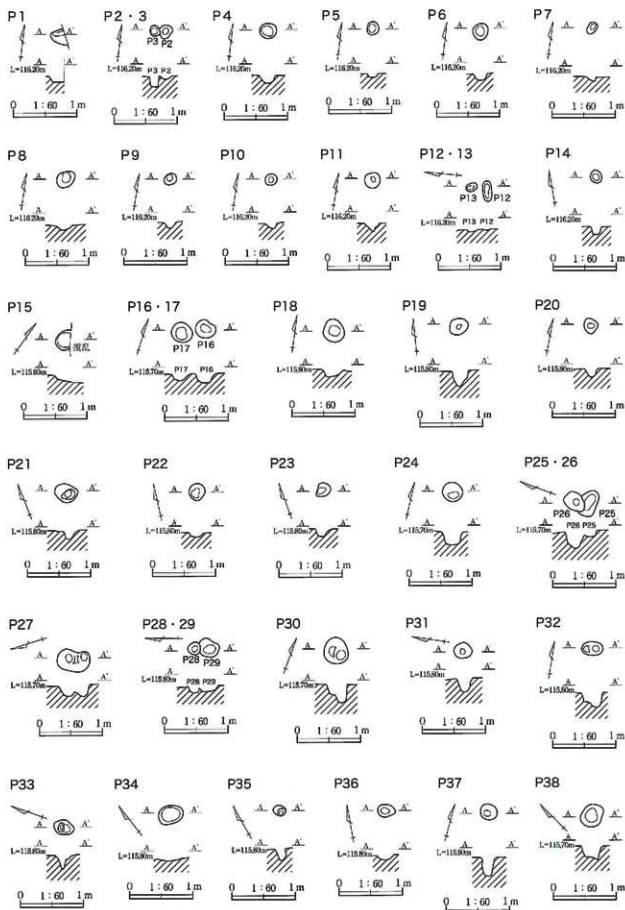
主軸方位 N - 12° - W, E - 15° - N。形状等 南北3条、東西2条の浅い畝間溝が確認できる。畝間溝の断面は弧状を呈する。規模 東西3.44 m、南北2.16 mの範囲に確認でき、畝間溝の間隔は0.63 ~ 1.00 m、深さは0.04 ~ 0.06 mを測る。覆土 Hr-FAを含む。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代と考える。

(4) ビット (第7・8図、PL. 3)

P 1 (第7図) 位置 調査区南東端部 (X = 42.730, Y = - 72.505)。第1面で確認した。形状 東側は調査区外のため、詳細不明。規模 東西 [0.23 m] × 南北0.25 m、深さ0.13 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 2 (第7図) 位置 調査区南東端部 (X = 42.730, Y = - 72.505)。第1面で確認した。重複 P 3と重複するが、覆土の土質は同質であり、同時期だろう。形状 平面形は不整形円形、断面形は弧状を呈する。規模 東西0.22 m × 南北0.21 m、深さ0.05 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 3 (第7図) 位置 調査区南東端部 (X = 42.730, Y = - 72.505)。第1面で確認した。重複 P 3と重複するが、覆土の土質は同質であり、同時期だろう。形状 平面形は不整形円形、断面形は円筒状を呈する。規模 東西0.14 m × 南北0.16 m、深さ0.16 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物



第7図 ピット(1)

なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 4 (第7図) 位置 調査区南東端部 (X = 42.725, Y = - 72.505)。第1面で確認した。形状 平面形は円形、断面形は半円状を呈する。規模 東西0.26 m × 南北0.24 m、深さ0.13 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 5 (第7図) 位置 調査区南東端部 (X = 42.725, Y = - 72.505)。第1面で確認した。形状 平面形は不整形円形、断面形は弧状を呈する。規模 東西0.18 m × 南北0.21 m、深さ0.07 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 6 (第7図) 位置 調査区南東端部 (X = 42.725, Y = - 72.505)。第1面で確認した。形状 平面形は円形、断面形は半円状を呈する。規模 東西0.24 m × 南北0.27 m、深さ0.12 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 7 (第7図) 位置 調査区南東端部 (X = 42.725, Y = - 72.505)。第1面で確認した。形状 平面形は楕円形、断面形は三角状を呈する。規模 長軸0.22 m × 短軸0.13 m、深さ0.07 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 8 (第7図) 位置 調査区南東端部 (X = 42.725, Y = - 72.505)。第1面で確認した。形状 平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。規模 長軸0.32 m × 短軸0.24 m、深さ0.07 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 9 (第7図) 位置 調査区南東端部 (X = 42.725, Y = - 72.505)。第1面で確認した。形状 平面形は楕円形、断面形は半円状を呈する。規模 長軸0.22 m × 短軸0.18 m、深さ0.09 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 10 (第7図) 位置 調査区南東端部 (X = 42.725, Y = - 72.505)。第1面で確認した。形状 平面形は円形、断面形は三角状を呈する。規模 東西0.18 m × 南北0.18 m、深さ0.10 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 覆土中から土師器杯の口縁部が1片出土したが、細片であり図示には至らなかった。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 11 (第7図) 位置 調査区南東端部 (X = 42.725, Y = - 72.505)。第1面で確認した。形状 平面形は円形、断面形は三角状を呈する。規模 東西0.24 m × 南北0.25 m、深さ0.14 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

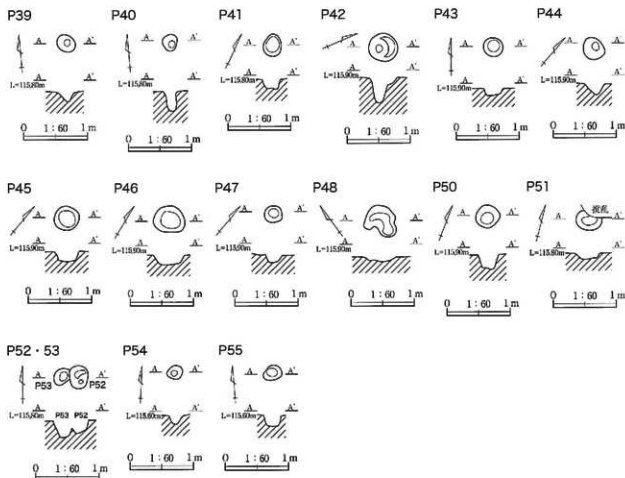
P 12 (第7図) 位置 調査区南東端部 (X = 42.725, Y = - 72.505)。第1面で確認した。形状 平面形は楕円形、断面形は浅い弧状を呈する。規模 長軸0.33 m × 短軸0.14 m、深さ0.04 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 13 (第7図) 位置 調査区南東端部 (X = 42.725, Y = - 72.505)。第1面で確認した。形状 平面形は楕円形、断面形は浅い弧状を呈する。規模 長軸0.19 m × 短軸0.13 m、深さ0.06 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 14 (第7図) 位置 調査区南東端部 (X = 42.725, Y = - 72.505)。第1面で確認した。形状 平面形は円形、断面形は円筒状を呈する。規模 東西0.17 m × 南北0.21 m、深さ0.13 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 15 (第7図) 位置 調査区北東端部 (X = 42.735, Y = - 72.510)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。形状 北東部を攪乱によって破壊され平面形は不明。断面形は浅い箱状を呈する。規模 東西 [0.25 m] × 南北0.33 m、深さ0.08 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 16 (第7図) 位置 調査区北部 (X = 42.735, Y = - 72.510)。第2面で確認したが、本来は第1面に属



第8図 ビット(2)

するものと考えられる。形状 平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。規模 長軸0.32m×短軸0.26m、深さ0.17mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 17 (第7図) 位置 調査区北部 (X = 42.735, Y = - 72.510)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。形状 平面形は円形、断面形は弧状を呈する。規模 東西0.34m×南北0.31m、深さ0.12mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 18 (第7図) 位置 調査区東部 (X = 42.730, Y = - 72.510)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。形状 平面形は円形、断面形は弧状を呈する。規模 東西0.33m×南北0.37m、深さ0.13mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 19 (第7図) 位置 調査区中央部 (X = 42.730, Y = - 72.510)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。形状 平面形は円形、断面形はU字状を呈する。規模 東西0.27m×南北0.26m、深さ0.27mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 20 (第7図) 位置 調査区中央部 (X = 42.730, Y = - 72.510)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。形状 平面形は不整形円形、断面形はU字状を呈する。規模 東西0.23m×南北0.26m、深さ0.23mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況か

ら中世以降と考える。

P 21 (第7図) 位置 調査区中央部 (X = 42.730, Y = - 72.510)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。形状 平面形は不整楕円形、断面形は階段状を呈する。規模 長軸 0.34 m × 短軸 0.28 m、深さ 0.16 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 22 (第7図) 位置 調査区中央部 (X = 42.730, Y = - 72.510)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。形状 平面形は円形、断面形は弧状を呈する。規模 東西 0.27 m × 南北 0.27 m、深さ 0.05 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 23 (第7図) 位置 調査区中央部 (X = 42.730, Y = - 72.510)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。形状 平面形は不整円形、断面形は箱状を呈する。規模 東西 0.27 m × 南北 0.22 m、深さ 0.13 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 24 (第7図) 位置 調査区北部 (X = 42.735, Y = - 72.510)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。形状 平面形は円形、断面形は円筒状を呈する。規模 東西 0.32 m × 南北 0.31 m、深さ 0.32 mを測る。覆土 基本層序Ⅳ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 25 (第7図) 位置 調査区北部 (X = 42.730, Y = - 72.510)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。重複 P 26と重複するが、覆土の土質は同質であり、同時期だろう。形状 平面形は不整楕円形、断面形は箱状を呈する。規模 長軸 0.44 m × 短軸 0.27 m、深さ 0.12 mを測る。覆土 基本層序Ⅳ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 26 (第7図) 位置 調査区北部 (X = 42.730, Y = - 72.510)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。重複 P 25と重複するが、覆土の土質は同質であり、同時期だろう。形状 平面形は不整楕円形、断面形はU字状を呈する。規模 長軸 0.36 m × 短軸 0.28 m、深さ 0.27 mを測る。覆土 基本層序Ⅳ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 27 (第7図) 位置 調査区北部 (X = 42.730, Y = - 72.510)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。形状 平面形は不整楕円形、断面形はU字状を呈する。規模 長軸 0.51 m × 短軸 0.33 m、深さ 0.16 mを測る。覆土 基本層序Ⅳ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 28 (第7図) 位置 調査区北部 (X = 42.730, Y = - 72.515)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。重複 P 29と重複するが、覆土の土質は同質であり、同時期だろう。形状 平面形は円形、断面形は円筒状を呈する。規模 東西 0.21 m × 南北 0.19 m、深さ 0.08 mを測る。覆土 基本層序Ⅳ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 29 (第7図) 位置 調査区北部 (X = 42.730, Y = - 72.515)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。重複 P 28と重複するが、覆土の土質は同質であり、同時期だろう。形状 平面形は不整円形、断面形は箱状を呈する。規模 東西 0.29 m × 南北 0.33 m、深さ 0.09 mを測る。覆土 基本層序Ⅳ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 30 (第7図) 位置 調査区北部 (X = 42.730, Y = - 72.515)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。形状 平面形は円形、断面形は階段状を呈する。規模 東西 0.38 m × 南北 0.42 m、深さ 0.31 mを測る。覆土 基本層序Ⅳ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以

降と考える。

P 31 (第7図) 位置 調査区北部 (X = 42.730, Y = - 72.510)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。形状 平面形は円形、断面形はU字状を呈する。規模 東西0.25 m × 南北0.29 m、深さ0.23 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 32 (第7図) 位置 調査区北部 (X = 42.730, Y = - 72.510)。第2面で確認した。形状 平面形は楕円形、断面形は階段状を呈する。規模 長軸0.35 m × 短軸0.22 m、深さ0.24 mを測る。覆土 As-Cを含む。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代と考える。

P 33 (第7図) 位置 調査区西部 (X = 42.730, Y = - 72.515)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。形状 平面形は楕円形、断面形は階段状を呈する。規模 長軸0.33 m × 短軸0.24 m、深さ0.23 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 34 (第7図) 位置 調査区西部 (X = 42.730, Y = - 72.515)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。形状 平面形は楕円形、断面形は浅い弧状を呈する。規模 長軸0.38 m × 短軸0.28 m、深さ0.03 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 35 (第7図) 位置 調査区中央部 (X = 42.730, Y = - 72.510)。第2面で確認した。形状 平面形は円形、断面形はU字状を呈する。規模 東西0.16 m × 南北0.18 m、深さ0.19 mを測る。覆土 As-Cを含む。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代と考える。

P 36 (第7図) 位置 調査区西部 (X = 42.730, Y = - 72.515)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。形状 平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。規模 長軸0.28 m × 短軸0.21 m、深さ0.08 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 37 (第7図) 位置 調査区西部 (X = 42.730, Y = - 72.515)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。形状 平面形は円形、断面形は円筒状を呈する。規模 東西0.27 m × 南北0.24 m、深さ0.29 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 38 (第7図) 位置 調査区北西部 (X = 42.730, Y = - 72.515)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。形状 平面形は不整形円形、断面形は円筒状を呈する。規模 東西0.41 m × 南北0.33 m、深さ0.34 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 39 (第8図) 位置 調査区北西部 (X = 42.730, Y = - 72.515)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。形状 平面形は円形、断面形は三角状を呈する。規模 東西0.27 m × 南北0.28 m、深さ0.15 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 40 (第8図) 位置 調査区北西部 (X = 42.730, Y = - 72.515)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。形状 平面形は不整形円形、断面形は円筒状を呈する。規模 東西0.24 m × 南北0.27 m、深さ0.33 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 41 (第8図) 位置 調査区東部 (X = 42.730, Y = - 72.510)。第2面で確認したが、本来は第1面に属

するものと考えられる。形状 平面形は楕円形、断面形は円筒状を呈する。規模 長軸 0.35 m × 短軸 0.28 m、深さ 0.16 m を測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 42 (第 8 図) 位置 調査区南東端部 (X = 42.725、Y = - 72.505)。第 2 面で確認した。形状 平面形は円形、断面形は階段状を呈する。規模 東西 0.45 m × 南北 0.46 m、深さ 0.39 m を測る。覆土 Hr-FA を含む。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代と考える。

P 43 (第 8 図) 位置 調査区南東端部 (X = 42.725、Y = - 72.505)。第 2 面で確認した。形状 平面形は円形、断面形は箱状を呈する。規模 東西 0.31 m × 南北 0.30 m、深さ 0.12 m を測る。覆土 Hr-FA を含む。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代と考える。

P 44 (第 8 図) 位置 調査区南東端部 (X = 42.725、Y = - 72.505)。第 2 面で確認した。形状 平面形は不整形円形、断面形は三角状を呈する。規模 東西 0.37 m × 南北 0.33 m、深さ 0.17 m を測る。覆土 Hr-FA を含む。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代と考える。

P 45 (第 8 図) 位置 調査区南東端部 (X = 42.725、Y = - 72.505)。第 2 面で確認した。形状 平面形は円形、断面形は箱状を呈する。規模 東西 0.37 m × 南北 0.39 m、深さ 0.18 m を測る。覆土 Hr-FA を含む。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代と考える。

P 46 (第 8 図) 位置 調査区南東端部 (X = 42.725、Y = - 72.505)。第 2 面で確認した。形状 平面形は不整形円形、断面形は箱状を呈する。規模 東西 0.50 m × 南北 0.41 m、深さ 0.15 m を測る。覆土 Hr-FA を含む。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代と考える。

P 47 (第 8 図) 位置 調査区南東端部 (X = 42.725、Y = - 72.505)。第 2 面で確認したが、本来は第 1 面に属するものと考えられる。形状 平面形は円形、断面形は半円状を呈する。規模 東西 0.29 m × 南北 0.29 m、深さ 0.15 m を測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 48 (第 8 図) 位置 調査区南東端部 (X = 42.725、Y = - 72.505)。第 2 面で確認した。形状 平面形は不整形、断面形は浅い弧状を呈する。規模 東西 0.49 m × 南北 0.57 m、深さ 0.07 m を測る。覆土 Hr-FA を含む。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代と考える。

P 49 (第 8 図) 位置 調査区南東部 (X = 42.730、Y = - 72.505)。第 2 面で確認した。重複 3 号土坑と重複し、本跡の方が古い。形状 平面形は円形、断面形は半円状を呈する。規模 東西 0.34 m × 南北 0.30 m、深さ 0.20 m を測る。覆土 Hr-FA、As-C を含む。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代と考える。

P 50 (第 8 図) 位置 調査区南東部 (X = 42.730、Y = - 72.505)。第 2 面で確認したが、本来は第 1 面に属するものと考えられる。形状 平面形は円形、断面形は円筒状を呈する。規模 東西 0.35 m × 南北 0.36 m、深さ 0.24 m を測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 51 (第 8 図) 位置 調査区東部 (X = 42.730、Y = - 72.505)。第 2 面で確認したが、本来は第 1 面に属するものと考えられる。形状 北東部を攪乱によって破壊されるが、平面形は楕円形、断面形は浅い箱状を呈する。規模 長軸 0.42 m × 短軸 0.32 m、深さ 0.13 m を測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 52 (第 8 図) 位置 調査区北端部 (X = 42.735、Y = - 72.510)。第 2 面で確認したが、本来は第 1 面に属するものと考えられる。重複 P 53 と重複するが、覆土の土質は同質であり、同時期だろう。形状 平面形は楕円形、断面形は階段状を呈する。規模 長軸 0.37 m × 短軸 0.29 m、深さ 0.23 m を測る。覆土

基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 53 (第8図) 位置 調査区北端部 (X = 42.735, Y = - 72.510)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。重複 P 52と重複するが、覆土の土質は同質であり、同時期だろう。形状 平面形は不整形、断面形は円筒状を呈する。規模 東西0.24 m × 南北0.27 m、深さ0.26 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

P 54 (第8図) 位置 調査区北部 (X = 42.730, Y = - 72.510)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。重複 4号土坑と重複するが、覆土の土質は同質であり、同時期だろう。形状 平面形は円形、断面形は半円状を呈する。規模 東西0.24 m × 南北0.22 m、深さ0.13 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

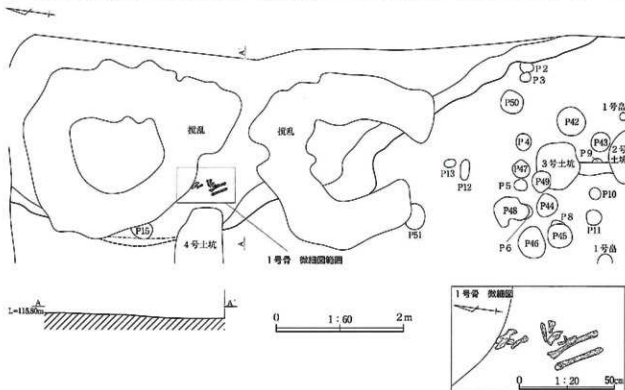
P 55 (第8図) 位置 調査区北部 (X = 42.730, Y = - 72.510)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。重複 4号土坑と重複するが、覆土の土質は同質であり、同時期だろう。形状 平面形は不整形、断面形は円筒状を呈する。規模 東西0.29 m × 南北0.23 m、深さ0.17 mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。出土遺物 なし。時期 堆積状況から中世以降と考える。

(5) 低地部 (第9図)

第2面の調査区東端部は、東に傾斜する浅い低地部となっていた。この範囲には、As-B 純層の堆積が良好に観察でき、堆積の厚い調査区北東端部では20 cm前後の層厚をもち、2～3のフォール・ユニットが観察できた。As-B 直下の旧地表面は移植ゴテを用いて精査を行い、微細痕跡の検出に努めたが、足跡や耕作痕、畦畔等は確認できなかった。旧地表面の直上からは1号骨が出土した。風化が著しく詳細な観察はできないが、馬等、獣骨の大胸骨ないし脛骨にあたる部位の可能性が指摘できる。

(6) 窪地

第2面では、基本層序Ⅲ層土または、As-C 混土の不整形な遺構プランを確認することができた。これらはいずれも非常に浅く不整形で、人為的な遺構とは認識し難いことから、自然地形の「窪地」として調査を行った。

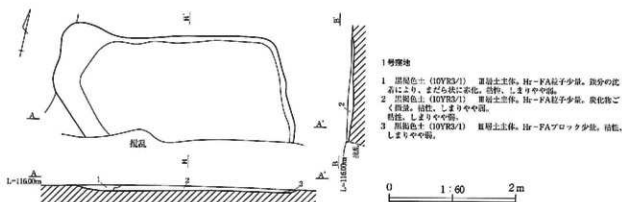


第9図 As-B直下の低地部と1号骨出土状況

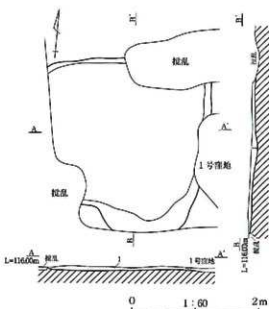
1号窪地(第10図) 位置 調査区南端部(X=42.725、Y=-72.510)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。重複 2号窪地と重複するが、覆土の土質は同質であり、同時期だろう。形状 平面形は不整形、断面形は浅い皿状を呈する。規模 東西3.81m×南北[1.79]m、深さ0.10mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。底面 基本層序Ⅵ層に達し、底面は平坦。硬化面等は確認できなかった。出土遺物 覆土中から土師器環の胴部1片が出土したが、細片のため図化には至らなかった。時期 堆積状況から中世以降と考える。

2号窪地(第10図) 位置 調査区南西端部(X=42.725、Y=-72.510)。第2面で確認したが、本来は第1面に属するものと考えられる。重複 1号窪地と重複するが、覆土の土質は同質であり、同時期だろう。形状 平面形は不整形、断面形は浅い皿状を呈する。規模 東西[2.56]m×南北[2.77]m、深さ0.07mを測る。覆土 基本層序Ⅲ層土を主体とする。底面 基本層序Ⅵ層に達し、底面は平坦。硬化面等は確認できなかった。出土遺物 覆土中から第11図2の古銭が出土し、北宋銭「皇宋通寶」(1038年初鋳)と判別できた。

1号窪地



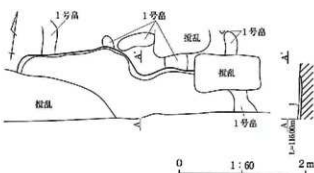
2号窪地



2号窪地

1 黒褐色土(10YR3/1) 覆層土主体、Hr-Fa粒子少量、炭分の沈着により、まだら状に赤化、粘粒、しまりやや弱。

3号窪地



3号窪地

1 黒褐色土(10YR3/1) As-C少量、Hr-Faブロック微細、粘粒、しまり弱。

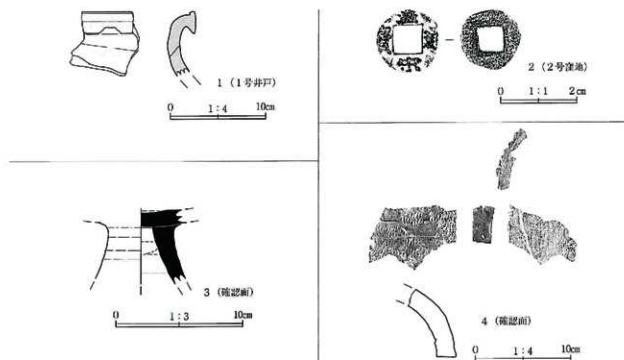
第10図 窪地

ほかに、覆土中から、須恵器高台付杯の底部1片が出土したが、細片のため図示には至らなかった。時期 堆積状況から中世以降と考える。

3号窪地(第10図) 位置 調査区南東部(X=42.725, Y=-72.505)。第2面で確認した。重複 1号畠と重複し、本跡の方が古い。形状 平面形は不整形、断面形は浅い皿状を呈する。規模 東西[3.48]m×南北[1.14]m、深さ0.04mを測る。覆土 Hr-FA、As-Cを含む。底面 基本層序IX層に達し、底面は平坦。硬化面等は確認できなかった。出土遺物 なし。時期 堆積状況から古墳時代と考える。

(7) 遺構外出土遺物

基本層序Ⅲ層中からは、第11図4の丸瓦片が出土した。細片だが欠損状態から玉縁式(有段式)丸瓦の狭端部と考えられる。凹面には縄目き、凸面には布目痕が観察できる。基本層序Ⅲ層中からは他に、常滑焼堿の胴部片や陶磁器片、須恵器杯・甕片、土師器甕片が出土したが、細片のため図示には至らなかった。基本層序Ⅵ層中からは第11図3の須恵器高杯が出土した。脚部の直径と器高から高杯としたが、高盤脚部の可能性も残る。8~9世紀の年代假が推測できる。基本層序Ⅴ層中からは他に、灰釉陶器壺片、須恵器杯・甕片、土師器甕片が出土したが、細片のため図示には至らなかった。基本層序Ⅳ層中からは、縄文土器深鉢の胴部片が出土したが、細片で摩滅が著しく図示には至らなかった。



第11図 出土遺物

第2表 出土遺物観察表

層序	出土位置	種類、器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	焼成	色澤	器形、成・盤形の特徴	保存状況 番号
Ⅲ	1号井戸 No. 1	常滑焼 堿	-	-	[6.8]	石英、白色粒	浅灰	常滑赤色	口縁部内外面ヨコナデ。	口縁部破片。
Ⅲ	出土位置	種類、器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	焼成	器名	特徴	保存状況 番号
Ⅱ	2号窪地 覆土	陶磁器 青灰	[1.7]	0.7	0.9	1.0	素赤	「皇室遺寶」。対流。製作。1000年前後。		破断欠損。
Ⅲ	出土位置	種類、器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	焼成	色澤	器形、成・盤形の特徴	保存状況 番号
Ⅲ	基本層序 Ⅵ層中	須恵器 高杯	-	-	[3.8]	特色粒、白色 粒、小粒	浅灰	赤色	杯部外面ロクロナデ、杯部内面ロクロナデ。使用 による片減割害。器底内外面ロクロナデ。	破断破片。
Ⅲ	出土位置	種類、器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	胎土	焼成	色澤	器形、成・盤形の特徴	保存状況 番号
Ⅳ	基本層序 Ⅳ層中	瓦 丸瓦	[8.7]	[5.4]	2.0	特色粒、白色 粒	浅灰	灰白色	内面縄目き。凹部非目取。	凹部破片。

VI 発掘調査の成果と課題

今回の発掘調査では、調査面積の狭さや遺構密度の低さも相まって、得られた情報は限定的である。そのためここでは、第1次調査の成果も加味した上で、各時代ごとの総括を行い、まとめたい。

1 古墳時代

1次調査では、畝間溝の覆土にAs-Cを含む畠跡(SU-12・15・17・18・19)が、調査区の東半部で確認されている。東に隣接する鳥羽遺跡B・C区でも同様の畠跡(さく状遺構)が部分的に確認されており、さほど活発ではないものの、生産域として利用されていたことがわかる。しかし、今回の調査では同様の畠跡は確認できず、土坑2基(2・3号土坑)とピット2基(P32・35)、自然地形の窪地(3号窪地)が散発的に確認できたのみである。ちなみに、今回の調査地点では、1次調査で安定的に確認されたAs-C混入の黒色土層(Ⅷ層)の地積が、調査区南東端部に確認できるのみで、以西では流出によるためか確認できなかった。この点を鑑みると、今回の調査地点は染谷川的作用によって形成された、南北に長い自然堤防状の微高地とその西側に展開する低地の地形変換点付近にあたると思われる。その不安定な地形的要因ゆえに生産域としても利用されなかったものと考えられる。なお、対応する集落跡は直近に確認できず、北方約1.0kmに位置する上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡や元総社西川遺跡など、染谷川の自然堤防上に存在している。

また、今回の調査では、畝間溝の覆土にHr-FAのブロックを含む畠跡(1号畠)を確認した。同様の畠跡は、1次調査や隣接する鳥羽遺跡B・C区では確認されていない。Hr-FAの純層は、1次調査地点の北東部で確認されているのみで、隣接する鳥羽遺跡D・E区や稲荷台村南遺跡など周辺遺跡でも確認されておらず、染谷川西岸の微高地上において、Hr-FAやこれに伴う洪水による災害は、限定的であったとも考えられよう。実際に該期の集落跡は、鳥羽遺跡H・M区、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡、標高辻久保遺跡など染谷川西岸の自然堤防上に高い密度で確認できる。しかしながらその労働力は、元総社北川遺跡のFA洪水層を開削した水田跡に代表されるような、FA洪水によって甚大な被害を受けた牛池川流域の復興・再開発に充てられたものと想定でき、本遺跡周辺の開墾は限定的なものに留まったものと考えられる。

2 奈良・平安時代

今回の調査で確認したAs-Bによって埋没した低地部は、1次調査の低地部(窪地-01)につながる弱い谷地形と考えられる。該期における遺跡の様相は、この南北に走向する谷地形を境に東と西で大きく異なる。谷地形の東側は1次調査区の東半部にあたり、畠跡(SU-01・13)のような生産域として利用されていた土地が、9世紀中葉に至り集落域(SI-01～30)となるが、10世紀中葉には再び畠跡(SU-02～10・16)を中心とする生産域に逆戻りしている。9世紀中葉～10世紀中葉の比較的短期間に集落が営まれる要因は、この時期、東に隣接する鳥羽遺跡D・E区にも堅穴住居跡群が確認されており、1次調査で確認された堅穴住居跡群はその集落域の西端部を構成するものと考えられる。該期は、東山遺跡路「国府ルート」の整備など、国府周辺域における活動が一層の活発化を迎える時期でもある。鳥羽遺跡、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡、標高辻久保遺跡、元総社蒼海遺跡群など、国府周辺域の集落は、一様にその規模を拡大・拡散する傾向にあり、その末端部が本遺跡の1次調査区で確認されたものと考えられる。そのため、国府周辺域における集落展開のピークを過ぎると、早い段階で本遺跡のような末端部の集落は放棄され、再び生産域として開墾されたものと推測できる。

一方、今回の調査区と1次調査区の西半部を含む谷地形の西側には、該期においても集落域はもとより、水田や畠などの生産域としても利用された痕跡に乏しい。谷地形の以西は、染谷川によって形成された後背低地にかかるようであり、該期において積極的な土地利用はなされなかったようである。

また、今回の調査区で確認した、As-Bによって埋没した低地部からは、その直上から獣骨が出土した。この低地部と一連の谷地形と考えられる、1次調査の低地部(窪地-01)からも馬の下顎骨や歯骨が出土しており注目される。その出土状況から、周辺において廃棄され低地部へ流入したものが、この場へ安置し遺棄されたものかは判断し難いが、後者のような解釈が許される場合、馬を犠牲獣とする祭祀行為の痕跡として興味深い。該期において馬を犠牲獣とする祭祀は、旱や長雨などの天候回復を願っての行為と考えられており(水野 1978)、国府城南西部における生活地の南西端を地形的に制約するこの低地部において、以西に展開する後背低地の安定化を祈願し、殺馬祭祀が行われた可能性は指摘できる。

3 中世

今回の調査では井戸1基(1号井戸)を調査し、出土遺物から中世に帰属するものと判断した。同質の覆土が含まれる遺構としては、土坑1基(4号土坑)と46基のピットを確認したが、帰属時期を示すような遺物の出土はなく、詳細な時期は判断し難い。1号井戸の掘削深度は浅く、底面は総土砂層(XIV)の中途にあたり、わずかな湧水は確認できるものの、井戸としての機能に疑問が残る。同様の浅い井戸状遺構は、東に隣接する鳥羽遺跡E区で3基のみ確認でき(E3~5号井戸)、本遺跡の1次調査や鳥羽遺跡A~F区で多数確認された該期の井戸の大半が、掘削深度の深い形態であるのに対して異質であり、あるいは水溜のような機能も想定できる。その機能には問題が残るものの今回調査した1号井戸のほかに、1次調査においても15基の井戸が調査区全域に散在しており、これに対応する生活空間が想定されるが、1次調査も含めて多数のピットが確認されているものの、掘立柱遺物跡と認識できるピット群はほとんど確認されていない。なお、鳥羽遺跡D・E区で確認された館跡との関係であるが、第1期とされる内堀のみを巡らした段階において、館の内部に本遺跡が入らないことは、1次調査で相当する堀跡が確認されていないことから判断できる。一方、地籍図を用いた歴史地理学的な分析を主眼に想定された、外堀による拡張部を含む第2期の館跡の存在を考慮した場合、本遺跡の中世遺構群は館に内包されることになる。第2期の館が機能した時期は、外堀の出土遺物から14世紀末~15世紀中葉と考えられており、本遺跡で確認された中世遺構群は、この館跡に関連する可能性もあるが、井戸やピット等、個々の遺構の厳密な時期を判断する手段に乏しく、また、第2期の館跡の範囲も推測の域を出るものではなく、可能性を指摘する程度に留めたい。

引用・参考文献

- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2013 『自然災害と考古学』 上毛新聞社
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988 『鳥羽遺跡 I・J・K 区』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990 『鳥羽遺跡 L・M・N・O 区』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992 『鳥羽遺跡 A・B・C・D・E・F 区』
- 群馬県教育委員会 2000 『内堀跡群Ⅲ』
- 群馬県教育委員会 2000 『国府南部遺跡群Ⅰ・Ⅱ』
- 群馬県教育委員会 2001 『国府南部遺跡群Ⅲ』
- 群馬県教育委員会 2002 『国府南部遺跡群Ⅳ』
- 群馬県教育委員会 2003 『国府南部遺跡群Ⅴ』
- 高崎市 2000 『新編高崎市史 史料編2 原始古代Ⅱ』
- 高崎市教育委員会 1979 『正観寺遺跡群(Ⅰ)』
- 高崎市教育委員会 1980 『正観寺遺跡群(Ⅱ)』
- 高崎市教育委員会 1981 『正観寺遺跡群(Ⅲ)』
- 高崎市教育委員会 1982 『正観寺遺跡群(Ⅳ)』
- 高崎市教育委員会 2010 『福壽台・北金尾遺跡』
- 高崎市教育委員会 2013 『正観寺西原遺跡』
- 富岡市教育委員会 2013 『鑑定 上野国府 平成 23 年度調査報告』
- 水野正好 1998 『馬、馬、馬、—その語りの考古学』 『文化財学報 第二集』 奈良大学文学部文化財学科

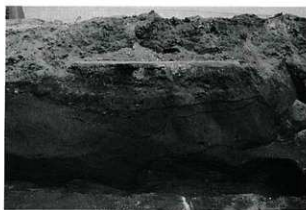
写真図版



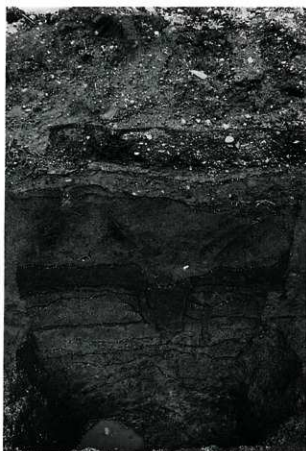
調査区全景（西から）



調査区全景（北東から）



基本層序A-A' (西から)



基本層序B-B' (西から)



基本層序C-C' (北から)



1号井戸 完掘状況 (北から)



1号井戸 遺物出土状況 (北から)



1号冢 検出状況 (北から)



1号冢 土層断面 (北から)



調査区北部のピット群 (東から)



調査区南東部のピット群 (東から)



低地部と1号骨 (北西から)



1号骨 出土状況 (北西から)



1号窪地 完掘状況 (北から)



2号窪地 完掘状況 (北から)



2号窪地 古銭 (11図2) 出土状況 (西から)



VI層中 須恵器高坏 (11図3) 出土状況 (北西から)



下層トレンチ 調査状況 (西から)



表土除去 作業風景 (北東から)



発掘調査風景 (南東から)



発掘調査風景 (北西から)



11図1
(1号井戸)



11図2
(2号窪地)



11図3
(Ⅲ層中)



11図4
(Ⅲ層中)

出土遺物

報告書抄録

フリガナ	トウカダイキタカナオイセキ
書名	稲荷台北金尾遺跡 2
副書名	病院建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	-
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第340集
編著者名	中村岳彦
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371-0031 群馬県前橋市下小出町 1-15-3
発行機関	高崎市教育委員会
発行機関所在地	〒370-8501 群馬県高崎市高松町35-1
発行年月日	2014年12月25日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
稲荷台北金尾遺跡	群馬県高崎市稲荷台町字北金尾1316番	102020	611	36°22' 55"	139°1' 31"	20141002 ~ 20141017	141.0㎡	病院建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稲荷台北金尾遺跡	集落	古墳時代	土坑 2基 畠 1面 ピット 8基 窪地 1箇所		・As-C、Hr-FAを覆土に含む遺構。
		平安時代	低地部 1箇所	須恵器 土師器 歌骨	・As-Bで埋没した微地形上の低地部。
		中世以降	井戸 1基 土坑 2基 ピット 47基 窪地 2箇所	陶磁器 古銭	・As-B混入土を覆土とする遺構。

稲荷台北金尾遺跡 2

病院建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014年12月23日 印刷
2014年12月25日 発行

発行 高崎市教育委員会
〒370-8501 群馬県高崎市高松町35-1
TEL. 027-321-1292

編集 技研コンサル株式会社
印刷 朝日印刷工業株式会社

